

1963年三重県生。三重大学医学部卒業後、総合病院の内科医を経て、2003年大阪市の淀川キリスト教病院で1年間ホスピス研修。よく04年より愛知県のJA厚生連南海病院・緩和ケア病棟に勤務。08年よりNPO法人「対人援助・スピリチュアル研究会」の田村久行先生に師事し、13年度から18年度まで同会・講師。医師生活30周年の18年6月希少がん「消化管間質腫瘍」（ジスト）が発見されて手術。抗がん剤治療を続けながら仕事復帰し、自身の経験を発信している。

本書は、医者が患者自身の立場で、とまどい、苦しみ、そしてわがままを通して、プラスの考え方を基本にして「患者風をふかせて」しぶとく、自由に日々を生きていこうとしている手記である。

【発病と検査】

下血によりがんの可能性が高いと判断し、自分が勤めている病院の信頼している先生に面談を依頼し、検査が始まった。胃カメラによる検査の結果、消化管間質腫瘍、ジストの疑いが高いことが分かった。

10万人に1人発症の稀な悪性腫瘍である。さらにCT検査の結果、胃の入り口あたりに10センチの巨大悪性腫瘍ができていた。長くは生きられないと思った。

*ジストとは、消化管の筋肉層に存在する特殊な細胞の異常増殖とされている。その結果、腫瘍が形成される。（著者の解説）

【手術と闘病生活】

手術は成功し、病理検査の結果待ちの間は家に帰り、闘病生活が始まった。抗がん剤とその副作用による消化液の逆流で食べられない、眠れない日々が続き焦った。

患者が「そんなに食べられんわ」と怒鳴などわがままな態度とと思っていたが、今初めてがん患者の真実が実感できた。そして、無理して食べなくていいと思うと気が楽になり、少しずつ食べられるようになった。

非常勤の仕事も少しずつ再開し、経済的なこともあったが、生きがいを感じた。

そして、苦しいのならば、我慢せず、いい人にならなくていい、「患者風」を吹かせて自由に生きていいのだ。心が楽になった。

がんであっても、自由にやらせてもらって、そのうえで周りから気遣いをいただくことで、満足でき安心して、1日を生きられる。

【がんの転移と余命】

2019.4.8肝臓に転移。余命に意識を向けるのではなく、今日から過ごせた日を数えて生きていこう。引き算ではなく足し算で。患者は腹をくくることによって、意外と悲しみを回避できる。腹のくくり方の一つが「足し算命」である。

【患者風吹かせて これだけは言いたい！ 12のこと】

筆者の言いたいことを12項にまとめたものである。

最後の12項では「あきらめる、そして頑張る」

がん患者の告知の場面で

- ① がんと診断された場面
- ② 転移や再発が出現した場面
- ③ もはや治療が不可能と判明した場面

自分が、がんになるまでは、「頑張らない、そしてあきらめない」と患者に話していた。

自分が、がんになって言いたい「あきらめる、そして頑張る」と声を大にして唱えたい。

今までの希望はあきらめて、これからの希望を頑張るのだ。

次の自分、すなわち今できることを頑張る。

筆者は、大橋洋平Facebook、ブログなどインターネット上での情報発信や交流などを通して、がん患者の励ましになったり、交流の場となったりして、現在も活躍しています。